讀賣新聞
1995年（平成7年）11月27日（月曜日）

# 昔の人は器用だった!?

わらを綯った縄の長さと、とぐろ巻きにした際の高さを競う「第十回なわならではピラミッド大会」が二十六日、秋田市土崎港西の覆い付き緑地セリオン・リスタで開かれた。

## わら縄ピラミッドに四苦八苦

秋田セリオン リスタで大会

今はあまり見かけないわらに触れ、コメ生産者の顔を思い起こそうと、「自然にカエル」を合言葉に有機農法などに取り組む秋田カエル村が企画した。

競技時間は百分。二十歳から七十四歳までの男女十一人が出場。約七十㌢のわら数本を両手に持ち、交互にこすり合わせる。慣れた手つきで手早く綯いあげるベテランもいれば、初体験で縄がほつれる若者も。会場はわらの懐かしいにおいに包まれ、見学者も思わずわらを手に取ってベテランの出場者に手ほどきを受ける姿も見られた。

出場者によると、約四十年前までは土木作業で土砂を運ぶ「もっこ」や、こん包用の縄などをわらで綯ったが、最近は運動会の縄綯い大会で使うわらさえ、探すのが難しいという。

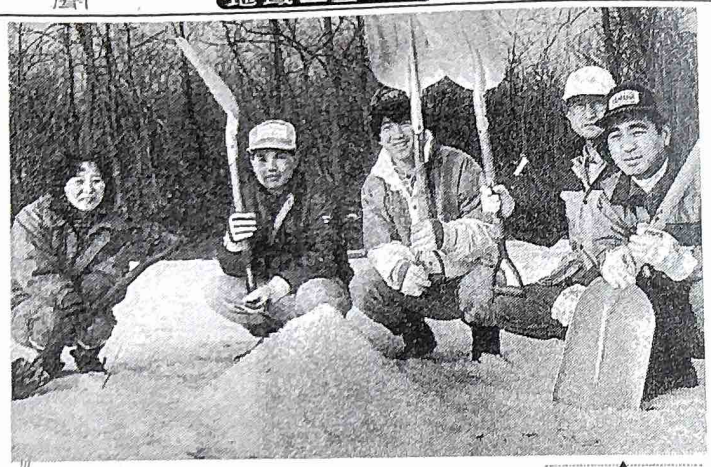
男鹿半島観光の途中で飛び入り出場した盛岡市上田、大学生久保田淳さん（三）は、「東京出身なので縄綯いはテレビでしか見たことがない。わらが一本につながらず難しい」と悪戦苦闘していた。優勝者は鹿角市花輪、農業佐藤隆三さん（七二）で、長さ二百六十六・六㍍、高さ百四十七㌢で三連覇を達成した。

わらで縄をなう指導を受ける出場者

地域ニュース 讀賣 1/2 1/15 （第三種郵便物認可）

# われら親雪人

●9○



「たかが雪積みだが奥深いものがある」と語る佐々木正光さん（中央）

## 重労働一転町おこしに

### 〝イベント出前〟で交流も

スノーピラミッド

スコップ一丁で、どれだけ高く天に近づけるか――。暮らしの中でなら、だれもが嫌がるはずの雪積み作業も「スノーピラミッド世界大会」と銘打ては、あの暗いイメージがすっかり影を潜めてしまうから不思議だ。

重労働を〝町おこし〟に演出した仕掛け人は、西仙北町のミニ独立国「秋田カエル村」の代表、会社役員佐々木正光さん（四二）と、その仲間たち。

昭和五十八年、若者たちの町おこし作戦としてカエル村が誕生した。メンバーは「今、自然にカエル時」を合言葉に、ピラミッドシリーズを次々に企画した。

その一つが、積み上げた雪の高さを競う「スノーピラミッド」。

佐々木さんは「海外からの留学生や技術研修者にも参加してほしい、との思いを込めて〝世界大会〟とうたった」と笑いながら、ネーミングの由来を語る。昭和六十一年にスタートし、今年が七回目になる。

たかが雪積み、たかが遊び――とは言うが、優勝賞金はなんと現金十万円。楯やカップなどはいっさいなく、入賞者への賞品も、みそ、しょうゆ、漬物など、カエル村の〝特産品〟一年分といった品々で、しっかりと郷土をPRすることも忘れない。

スノーピラミッド大会が開かれる時期は、この地方でも、最も冬の厳しい二月。ルールは簡単。競技時間が百分。使用する道具は、自分のスコップ一丁だけ。完成したピラミッドの頂上には、自分が立つこと。

単純な競技だが、ピラミッドの基礎が大き過ぎると上に伸びないうちに時間になってしまう。小さ過ぎると途中で不安定になって万事休すという具合で、「汗と涙と笑いのドラマ」が繰り広げられる。

毎回、関東方面などのミニ独立国からの〝外国勢〟も参加し奮闘するものの、やはり地元勢にはかなわない。過去六回の最高記録は五・二二㍍。賞金、賞品を狙って、毎年挑戦を続けている近隣からの常連もいるほどだ。

大会の運営スタッフ佐々木茂隆さん（三三）（役場職員）、斎藤正宏さん（三三）（郵便局員）らは「ただ力まかせに積み上げようとしてもだめ。雪質や盛など、現場の状況を判断し、それなりの工夫をしなければ高くできないところが面白い。雪を通じて、さまざまな仲間と自分たちや郷土の未来を考えていきたい」と楽しそう。

最近は大会の〝出前〟も頼まれ、一昨年は大曲市の雪まつり、今年（二月二日）は仙南村の雪まつり会場の中で大会を開く。

代表の佐々木正光さんは「私たちの暮らしは雪の中で作られてきた。雪に関心を持つ人が多くなってきたことはうれしい。このイベントがどこで開かれようとも、〝情報の発進源〟は私たち。同じ思いの仲間がいるなら、どこへでも出かけて協力したい」と、大会の出前にも積極的だ。